巻頭言

古典文学に見られる歯の病

加藤幸一

今年2008年は「源氏物語千年紀」，つまり『源氏物語』が成立してから千年目に当たるという。『源氏物語』が完成した正確な年代は不明なのだが，作者紫式部の日記の中に，寛弘（かんこう）５年（1008）当時『源氏物語』が宮中で広く読まれていたことをうかがわせる記述があり，それが千年紀の根拠となっているのである。今から８年前，2000年を記念して二千円札が発行され，その裏に国宝源氏物語絵巻の絵が採用された。これは『源氏物語』が成立してほぼ千年という大雑把なとらえ方によっている。採用されたのは，主人公光源氏が彼の秘密の子冷泉帝（れいぜいてい）と対面している場面である。冷泉帝は，表向き光源氏の父桐壷帝とその妃藤壺の間に生まれた皇子ということになっているが，実は光源氏と藤壺の子である。このような不義の子と対面している場面を使ったため，二千円札は『源氏物語』の専門家の間では不評であった。

今から千年前，平安時代においても人々は歯の病に苦しんだ。当時の文学作品に見える歯の病に関する記述はごくわずかであるが，今回はそれらを紹介したい。

『源氏物語』の中に，前節で紹介した冷泉帝の皇太子時代の様子を描いた場面がある。

御歯の少し朽ちて，口の内黒みて笑み給（たま）へる，かをりうつくしきは，女にて見奉（たてまつ）らまほしうきよらなり。（賢木（さかき）の巻）

（口語訳）歯が少し虫歯になって，口の中が黒みがかって微笑んでいらっしゃる，そのあふれるような美しさ，かわいらしさは，皇太子を女にして拝見したいほどのお美しさである。

下線を施したように，笑うと虫歯で口の中が黒みがかって見えるというのである。この時冷泉帝は６歳。年齢から見て乳歯が虫歯になっているのであろう。「笑み給へる」とあることから痛みはないのであろうが，「口の内黒みて」ということは広範囲に及んでいることになる。そんな冷泉帝の様子を，作者は「かをり，うつくしき＝あふれるように美しく，かわいらしい」ととらえている。つまり，虫歯の描写によって幼い皇太子の美しさ，かわいらしさを強調しているのである。『源氏物語』の描写の細やかさ，幼い子どもの描き方の巧さがうかがえるところである。「女にして拝見したい」とあるが，この物語における理想的な男性像は，限りなく女性に近い男であった。光源氏も同様に描かれている。つまり冷泉帝は，実の父光源氏に似た美しい男性として描かれているのである。

紫式部と同時期に清少納言という女性が活躍し，『枕草子』という随筆文学を著した。その中に，「病は」と書き出される章段がある。当時流行していた病を挙げた後に，歯

の病に苦しむ女性の姿が描かれる。

十八，九ばかりの人の，髪いとうるはしくて，丈(たけ)ばかりに，裾(すそ)いとふさやかなる，いとよう肥えて，いみじう色白う，顔愛敬(あいぎょう)づき，よしと見ゆるが，歯をいみじう病みて，額髪(ひたひがみ)もしとどに泣き濡らし，乱れかかるも知らず，面もいと赤くて，おさへてゐたるこそ，いとをかしけれ。

（口語訳）十八，九歳くらいの人で，髪がきちんと整って，背丈ほどの長さで，裾のあたりがとてもふさふさとしていて，ずいぶんよく太って，たいそう色が白く，顔は魅力的で，美人と見える女性が，歯をひどく病んで，額髪もぐっしょりと泣き濡らし，顔に乱れかかるのもかまわず，顔も真っ赤にして，痛いところを手で押さえている様子は，とても美しく魅力的である。

苦しんでいるのは，当時の結婚適齢期である十八，九歳の女性である。髪が豊かで長く色白という当時の美人の条件を備えている。「歯をいみじう病みて」とあるだけでどのような疾患なのかは記されていないが，「面もいと赤くて，おさへてゐたるこそ」とあるので，虫歯が進行し痛みが激しいのであろう。そのような姿を清少納言は「いとをかしけれ」ととらえる。「をかし」は，風情，魅力を発見したときに用いる言葉である。歯の痛みに苦しむ女性に同情を寄せるのではなく，外側から美的なものととらえているのである。これは『枕草子』の特徴的なとらえ方である。対象の内側には入らず距離を置いて見るのである。『源氏物語』が登場人物の内側に分け入るのとは対照的である。

承平(じょうへい)元年（931）ごろに編まれた辞書『和名類聚抄(わみょうるいじゅうしょう)』には，虫歯（齲歯）をはじめ歯の疾患がいくつか挙げられている。天元(てんげん)5年(982)に丹波康頼が著した医学書『医心方』には歯の病とその治療法が記されている。平安時代においても，歯の病に苦しむ人がおり治療がおこなわれていたことは確実である。古典文学に残る歯の病の描写に触れ，今からはるかな時代の歯科治療や人々の気持ちに思いをはせることも，歯科医師を目指す学生にとって無駄なことではあるまい。

〈注〉『源氏物語』『枕草子』の本文は，新編日本古典文学全集（小学館）による。
ただし，一部表記を改めた箇所がある。口語訳は，筆者。

（奥羽大学歯学部文学講座）